

「詩篇 62 篇 1 節～ 12 節」

詩篇62篇 1 節～ 12 節

■ あなたの心はどうですか？

新年、地震に見舞われた能登の町。その仮設に住む人々はこの先まだどうなるかわからない、解決がすぐにはない状況の中で、笑いがありません。悲しみの中にあって神様は笑うことを回復されたのです。今、みなさんの心はどうですか？私たちは神様を賛美し、元氣よく一生懸命生きる日もあれば、自分の計画が様々な影響によって変わってしまう、だめなことはわかっていても繰り返してしまい行くところまでいかないとかかわらない、私たちにはそんな弱さもあるのではないのでしょうか。

ネヘミヤは誰も再建できなかった城壁を、神様の声に聞きしたがいい 50 日で再建しました。私たちには自分で自分の心や環境を再建することはできません。神様の介入なしにはできないのです。だから神様に戻る、それが再建の最短の道です。

■ 62 篇 1 節

ダビデが詩篇を書いた時、最愛の人である息子に裏切られた時でした。自分の息子が思うように育たないことそれだけでも心苦しいのに、欲にかられた息子が父であるダビデをの王位を狙い、また命まで奪おうとするそんな悲劇が起きました。このとき告白したのが

「私のたましいは黙って、ただ神を待ち望む。私の救いは神から来る。」(1) でした。

「私のたましい」とありますが、私たちのたましいはどこにあるのでしょうか。感情と霊は違います。私たちの肉体は、いつかは滅びますが内なるものは日々新しくなり、神様を知れば知るほど私たちの内側に希望が湧き上がってきます。「ハレルヤ」とは「我がたましいよ。主をほめたたえよ」と命令する言葉です。命令しないとほめたたえられない、そんな状況の中で、それでも主をほめたたえる、そのようにダビデは霊を意識していたのです。だから息子に命を狙われている状況の中にあっても、ダビデは、具体的な戦略をたてるのではなく、乱れているたましいに向かって「たましいよ静まれ」といったのです。神様を知っている人にとって、静まった状態とは、感情的には痛くても平安がある状態です。だから必ず乗り越える道を見つけることができます。「だまって待ち望む」ことができるのは、私たちの救いは神からくるからであり、ダビデはそういつも賛美していました。

■ 2 節

「神こそ、わが岩。わが救い。わがやぐら。私は決して、ゆるがされない」(2)

私たちは、自分の人生は決してゆるがされない、そしてゆるがされたくもないはずですが。でももっとすごい地震も紛争もこれから起こり、最後は今まで見たことないようなことがたくさん起こってきます。でも人生の土台は人でも国家でもない、日々の土台はイエス・キリストという岩の上に立て上げられているからどんなことが起こっても大丈夫・ダビデのように告白できるのです。

■ 3 節・4 節

「おまえたちは、いつまでひとりの人を襲うのか。おまえたちはこぞって打ち殺そうとしている。城壁を傾け 石垣を倒すように」(3) 私たちが守られていると思うものが集団によって破壊される、一人をみんなでいじめめる・そんな状況にダビデは押しやられました。

「実に、彼らは人を高い地位から突き落とそうと企んでいる。彼らは偽りを好み、口では祝福し、心の中では呪う。セラ」(4)

私たちは口や形で美しい物をつくっていても、心の奥は汚いので、私たち人間関係は家族であってもドロドロしているのです。だからこそ私たちがすべきことは、自分自身も傷によって愚かなことをしてしまう弱さをもっていることを、まずは認めることです。聖書には義人はいないとあります。イエス様が一番問題だと思っていたのは、自分はいい人だと思っている人だと指摘しました。パリサイ人です。

預言者ホセアはゴメルと結婚しました。ゴメルは欲がコントロールできず何度か夫であるホセアを裏切ります。その度にホセアは愛するゴメルを買い戻します。そしてこのゴメルは「私」です。誰一人ホセアにはなれません。そしてパリサイ人の心も私たちにはあることを知っておかなければなりません。恵みによって救われたのに自分のことを棚にあげてすぐに人を裁いてしまうのです。自分のたましいを見つめ、自分がどこから救われたかを覚えなければ、私たちはすぐに居場所を忘れ、肉や感情が人を裁き始め、愛の教会が居心地が悪くなってしまうのです。そうして外の問題に気づきますが、自分の内なる問題に気づけなくなるのです。

■ 5・6・7・8 節

「私のたましいよ 黙って、ただ神を待ち望め。私の望みは神から来るからだ。神こそ、わが岩。わが救い。わがやぐら。私はゆるがされないことがない。」(5・6 節)

荒れ狂っている現状の中でダビデは、問題よりも、滅びゆく自分の肉体よりも自分のたましいがしっかり神を見上げているかを確認して主に告白しました。

そして「私の救いと栄光は、ただ神にある。私の力の岩と避け所は、神のうちにある。」(7) とも言っています。

「民よ。どんなときにも神に信頼せよ。あなたがたの心を神の御前に注ぎ出せ。神は、われらの避け所である。セラ」(8)

「セラ」とは一時停止です。人は一呼吸停止が大切です。そしてどんなときでも神に信頼することを今学べといわれています。

■ 9・10

「低い者は、ただ空しく、高い者も偽りだ。秤にかけると、彼らは上に上がる。彼らを合わせても、息より軽い。」(9)

私たちは社会の中では、自分たちで「低い者」「高い者」とつけますが、そんなことは時がたてば忘れてしまいます。人は吹き飛んでしまうような軽い存在です。神の権威によって一人ひとりに命がゆだねられているだけであって自分一人で健康さえもコントロールできないのが私たちです。でも私たちは目に見えるものに頼ってしまいます。だからこうしています。

「圧制にたよるな。略奪に空しい望みをかけるな。富が増えても、それに心を留めるな。」(10)

いくらお金や権威があっても私たちの霊やたましいを満たすことはできません。キルケゴールは「人は悩んでいるときに自分を見ればみるほど落ち込んでいく」といっています。でもそんな時にイエス・キリストをしっかり見上げると、そこに希望を見つめることができます。私たちの体も心も、瞳が見るほうに向くようになっているからです。だからたましいの瞳がどこを見ているか、それが大切です。「私たちは驚のように翼をかって高く飛んでいく」これが神のイメージです。下ばかり見ず、瞳を神に向けよとされています。

■ 11・12 節

「神は、一度告げられた。二度、私はそれを聞いた。力は、神のものであることを。主よ。恵みもあなたのものです。あなたは、その行いに応じて、人に報いられます。」(11,12)

どこを向いているかで圧倒的に注がれるのにダビデはそれを知りませんでした。そして自分の力、権力、自分の城、国家が永遠だと思って生きていたが、人生の後半まさか自分の息子に命を狙われるなんて想像もしていませんでした。でもそれを通して「わがたましいよ、だまって神を待ち望め」・人間の基本にダビデは戻ることができたのです。

■ まとめ

私たちは誰かが自分を不幸にしていると思ってしまいます。もちろん、そういうこともあるでしょう。人の罪が自分の人生に影響を及ぼすこともあります。でも聖書はそれでも「だまって神を見上げよ」とあります。大切なのは「神様とあなたのたましいが一つになること」であるといっています。今まであなたはダビデのように仮面をつけ、違う名前をつけ、違う洋服を着、鎧を着て一生懸命生きてきたかもしれないかもしれません。でも、その仮面をとれと言われています。本来のあなたの姿に戻らなくてはいいけないのです。

神様はゆっくり私たちを導いてくださるよいお方です。そして今日、「私の元へ戻れ」と言われています。ぜひ瞳を神様に向け、神様の元へ戻りましょう。そして必要のない仮面をとり、本来の自分を取り戻していきましょう。

(要約者:岩崎祥誉)

(2024年10月27日)